

BCJメンバーが語る『メサイア』合唱の魅力

ソプラノ：藤崎 美苗／松井 亜希
アルト：青木 洋也 バス：渡辺 祐介

25回目を迎えるサントリーホールでのBCJ『メサイア』。出演メンバーに合唱の特徴や魅力を語っていただきました。

——初めに、それぞれのパートの特徴、楽しいところ、苦労するところなどお話しください。

松井 『メサイア』は耳馴染みの良いメロディが多く、歌っていて楽しい作品です。アンサンブルが好きなメンバーが集まっていますので、他のパートとの絡みとか、不協和音を作つてそこから解決するところ、テンションが上がって一緒に駆け出すところなど、毎年ワクワクしながら歌っています。特に第1部は、ソリストに暗い面を歌つていただいて、合唱は希望に満ちた曲が多い印象なので、毎回始まりからテンションを上げて、いくぞ！という感じですね。

藤崎 そうですね、第1部の合唱はソプラノから始まるところが多くてドキドキしますが、おめでたい場面でソプラノが活躍するので、幸せな気持ちで歌っています。特に「For unto us」（第11曲）の出だしは、いきなりG Major（ト長調）で明るく始まるところが大好きですね。あと私は、第25曲「He trusted in God」で、テーマがバスから順番に上がってくるのを聴きながら、来たな来たなど高まってくる感じがとても好きだつたりします。

大変なのはメリスマの細かい動きで、第11曲も、アルトと並行3度音程で、けっこう

な長さのメリスマを歌うんですね。ここは曲の後半になって、低めの音程でメリスマが続くのでしんどいです。

青木 プレスも苦労するし、弦楽器も一緒にメリスマですから、アンサンブルが難しいところですね。

『メサイア』の合唱のアルトパートは、五線の真ん中から下に書かれている、女性のアルトにとっては鳴りにくい低めの音域が続きます。逆にカウンターテナーにとっては、ここが鳴らないといけないという音域なんです。BCJの『メサイア』では、必ずアルトパートにカウンターテナーが1名は入るので、この混合により、女性が弱いところを補える利点があります。

2020年にはアルトソロを歌いましたが、ソロの醍醐味は、やはり第2部冒頭のソロ「He was despised」（第20曲）。合唱では、アルトが前面で活躍するのはあまりなくて、ソプラノにキラっと輝いてもらえるよう、アルトが優しく支えるという感じでしょうか。

松井 第2部の頭の合唱「Behold」（第19曲）はアルトから始まりますよね。受難になるとアルトが活躍するイメージがあります。

青木 そうだね、「He trusted in God」（第25曲）もそうだし。そして伝道のお話になると、ソプラノからスタートする。そういうふうに書き分けられていますね。どこまで意図されているのかはわからないけれど。テノールからスタートする合唱は1曲「Let us break」（第37曲）しかなくて、High G（高音のソ）から始まるので、ここは気合い入り

ますね。

藤崎 テノールは出だしのソロがかっこよくて素敵ですよね！

渡辺 バスについては、バッハにてもヘンデルにても、基本、通奏低音ですから、全体を眺められる位置で歌えるのが、とても楽しいです。バロック音楽の基礎はベースにあるので、そこを司りながら歌えるのがバスの特権だと思います。『メサイア』で苦労するのは、やはりメリスマ（苦笑）。バス歌手=転がらない、というイメージがあって、それを払拭しないといけないんですが、実際、毎年緊張するし、僕らの正念場なんです。20年以上やってきて、ずいぶんうまくなつたと思うんだけどなあ…。特に「For unto us」（第11曲）は長いし、音程は上がっていくし、コンティヌオ（通奏低音）が少ししかなくてほとんど丸裸にされちゃうので、恐怖との戦いです。

でも実を言うと、僕は「アーメン」（終曲）の最初が一番緊張するんです。2時間以上歌つて声帯が疲れているときに、この繊細な出だし。しかも、最後に言いたかったのはこれです、っていう場面でしょ。毎年必死です。

——他の作品にない『メサイア』の特色、そのなかの合唱の位置づけについては、いかがでしょう。

松井 合唱がストーリーを動かしている作品だと思います。

藤崎 分量的にも合唱が半分くらいでものね。

青木 その合間をソリストが補足したり、展開したりする、という感じですね。

しかも、わずか2時間半で、イエスが生

まれる前からその生涯を描いている『メサイア』のような作品はバッハではないんですね。BCJで演奏している教会センターとも、聖書のこの部分、という特定のお話だし、受難曲、クリスマス・オラトリオなどもそう。

『メサイア』は、ハッピーな場面では音楽が明るく、十字架につけられたとか苦しい場面では、リズムが厳しくなって音も低めになり、伝道になるとまた雰囲気が変わる……というふうに、イエスの生涯をわかりやすくたどれる作品だと思います。

渡辺 そのあたりが、ヘンデルがオペラ作曲家だった現れかなと思いますね。ストーリーの展開がすばらしい。

『メサイア』のジェネンズの台本を読むと、僕はクリスチャンじゃないからそう感じるのかもしれないけれど、読み解くのが難しい部分があるんですよね。降誕にしても「生まれました」とあるわけじゃなくて、暗示的に書かれている。その暗示的な台本をこれだけ具体的なものにしてしまえるヘンデルの力はすごいなと思うんです。しかも『メサイア』は特殊で、実際、イエスが亡くなるシーンも描かれていないし、オペラの台本のような筋書きもない。そこが、ヘンデルの他のオラトリオと決定的に違うところだと思います。

藤崎 登場人物はメサイアだけで、ユダもピラトも出てこないですね。

松井 暗示的、ということで言うと、テキストのほとんどが旧約聖書からとられていてことと関係していますよね。

青木 第1部と第2部は、主に、イザヤ書、マラキ書、詩編など、預言から作られている旧約聖書ですね。そして、生まれるシーンとか、具体的に出来事が動くところで、

ルカなどの新約聖書が使われている。

渡辺 受難はイザヤ書と詩編が中心。

松井 受難のシーンであえて新約を使わないっていうところにジェネンズの意図が現れているんでしょうね。

青木 第3部は新約中心ですが、そこに突然（旧約の）ヨブ記が出てくるんですよね（第40曲「I know」）。ヨブはすべてを奪われてもイエスへの信仰を捨てなかつた人で、そのすさまじい信仰心を思うと、なぜここにヨブの言葉があるのか……。聖書を読んでいると、ジェネンズの聖書の扱い方に感心して、興味が尽きることないです。

——今年で25回目を迎えます。これまでの思い出などお聞かせください。

松井 私は最初にBCJに参加したのが2005年の『メサイア』の合唱からだったので、とても印象深いです。

青木 私は1回目の2001年から参加していますが、いつも雅明さんが何かしら新しいことを必ずしようとしているので、毎年新鮮な気持ちで歌っています。そして、サント

リーホールが一段と華やかになる時期なので、今年はどんなツリーかなあ、今回はこの色メインなんだ！という楽しみもありますね。

藤崎 そうそう、パートごとにツリーをバックに写真撮ったりね。

渡辺 そして、なんといっても楽しみなのはソリスト。僕は3回目からの参加ですが、ソリストが毎回変わるので、そこからの影響で流れも変わるので感じます。

藤崎 私は2回目から参加していますが、『メサイア』で初共演したソリストも多いんです。そこからBCJの常連になっていたり。皆さん、家族と過ごしたいだろうクリスマスを、私たちと一緒にいてくださることがすごく嬉しいし、サントリーホールの響きがいいので、初めて歌うソリストがとても嬉しそうにしているのを見ると、「いいでしょ、いいでしょ」と嬉しく思います。今年もとても楽しみです。

(2025年11月)

※文中の曲番号は、対訳の通し番号に沿った表記にしています。

